

特集記事「如何に米国を打ち負かすか」

勝利者の準備

崔軼亮

(訳者コメント)

中国人民網が中国海軍の雑誌「現代艦船」の特集記事タイトル”如何に米国を打ち負かすか”を紹介しています。

同雑誌の巻頭言が掲載されましたので紹介します。

その他の関連記事は、秘区分があるとかでネット上からは見ることはできません。

巻頭言の内容は、将来の米中衝突について、抽象論は置いといて、戦いの具体的中身を議論すべきとしています。著者の崔軼亮氏はおそらく現役の中国海軍軍人でしょう。

巻頭言

本号の特集記事は、米中間で将来発生する可能性がある衝突について論じる。我々が関心を持つべき重要なことは、米中間の衝突が不可避であるとか、或いは米中衝突の可能性はどのくらいあるとか、衝突発生の結果がどうだとかを議論することではなく、当然これらの問題も重要ではあるが、もっと重要なことは、主動的であろうと、受動的であろうと衝突に巻き込まれてしまった場合どうするかを考えることである。

我々が議論すべき重要な問題は、万が一、将来のある時期に本当に衝突が発生した場合、中国はどう対応すべきか、簡単に言えばこの戦いをどう戦うかである。

このような問題について、米国はもっと早くから研究している。私は中国もまたこの方面の研究を行っていると感じている。米国の専門家は、中国が展開する可能性のある作戦を“反介入作戦”に分類している。米国は、中国のこの種の挑戦に対抗するため、深く研究を行っており、その中で注目される作戦は“海空一体戦”と称される。実際上は、単に空軍及び海軍だけでなく、米国の4個の軍種全てが研究を行っており、現在これらの概念は“聯合作戦介入”に統合された。

このような変更を行う一つの重要な理由は、従来、米国各軍種の連携の枠組みが緊密でなく、すでに中国軍事力の急激な勃興に対応できなくなったからである。

この点は、中国人がいい気になってはならない。それどころか、米国が中国に対して挑戦しようとしたある時期に、中国は何を準備できるかを我々は注意しなければならない（例えば 20 年後）。このことは、我々が未だ 1 手も打っていないのに、米国はすでに対抗措置を開始したことを意味する。

実際は、現在でも、20 年後でも、米中の衝突地点、規模、及び強度は予測できる。なぜならば、可能性のある導火線は 3 本、北から南へ、第一列島線に沿って順次並んでいる。

三つの区域は、明確な地理的特徴がある。米国の軍事的存在は、北から南に向かって次第に弱くなっている。しかし衝突発生の可能性と緊迫性は北から南に向かうほど強くなっている。これは米国が反復してアジア回帰を強調する一つの理由かもしれない。

導火線は、第一列島線に沿って分布し、中国にとって有利な部分と不利な部分がある。不利な点は、中国の“経済のエンジン”に近すぎることである。利点は、中国が内戦作戦の利点を享受できることにある。

米国にとって、距離的な制約がある。すなわち兵力集中の困難性である。衝突勃発初期段階で作戦に投入できる兵力は、同盟国への駐留軍のほか、わずか 1 乃至 2 個の空母戦闘群だけの可能性がある。これらの兵力だけでは、将来の中国軍に対抗することは不可能であろう。

中国にとって、将来発生する可能性のある米中衝突に対応するためには、遠海における作戦システム、センサー能力、各軍種間の協力等々に注力する必要がある。このほか国家指導レベルで限定された戦略目標を保持すること、及び敏速な意志決定を行うこと、おそらくこれは軍事力建設よりもさらに重要であろう。

（ソース：「現代艦船 2013-08A」）